

老いを凝視めて

特別養護老人ホームでの三年

原慶子著

老いを凝視めて

— 特別養護老人ホームでの三年 —

原 慶 子 著



著者の横顔

榛名憩の園（特別養護老人ホーム）

昭和四十四年 設立・定員 百二十名

体の不自由な日常介護を必要とする老人の施設である。

ここでは理学療法、作業療法、レクリエーション、医療、看護をとらうして、在園者と職員の間、活発で温い交わりが築かれている。

●所在地

群馬県群馬郡榛名町中室田二二五二
電話〇二七三七（四）〇二六二番

序

加 藤 善 徳

原慶子さんの『老いを凝視めて』が、いよいよ上梓されるという。わがことのよう
な悦びを感じる。

著者は、私に序文を書けという。書く柄ではないと一旦はことわったが、考えてみ
ると、この書の誕生には、特別深いご縁のあったことも否めない。それらを書き綴る
ことは、解説の役目を果たすことにもなりそうなので、強いてペンをとることにした。

○

思えば著者に海外留学をすすめたのも、この書の第三部をなす「ヨーロッパ老人福
祉一人旅」を、「老人ホーム」に連載することを強請したのも私であった。また彼女
に、月刊一人雑誌『飛翔』の発刊をそのかし、実行にふみきらせたのも、私の仕業
であった。

本書の成立が、これら一連の実行路線につながる産物だとしたら、私も外野席応援団の一人として、喜びのおすそわけにあずかる資格があるのかも知れない。

○

私がこの書を世に出すことをおすすめたのは、これだけ老人問題がさげばれ、老人福祉が論ぜられているにもかかわらず、特別養護老人ホームの現場の発言が、殆んどないことを、常日頃遺憾に思っているからである。もちろん、専門誌や専門書に、特養側からの文献は、数多く発表されている。けれどもそれらは、いわゆる事例や技術、また論説のたぐいであって、現場で働く寮母や指導員の生の声ではない。寝たきり老人ホームの生きた実態、オムツの臭いのする内側からの報告が、一向になされていない。そこに私の不満があったし、社会がそれを求めていると思うのである。

本書はこの意味において、めずらしい特養の実態報告である。第一部には、現場の生態が活々と描かれており、第二部には、その実態を軸にした若々しい未来への展望が、現場をふまえて、慎重に立論されている。第三部は、これらの前奏曲で、特養に身を投ずる以前、その準備として著者の選んだ武者修業の記録である。

○

とまれ著者は、まだうら若い、聰明発刺たる一女性である。社会福祉を使命とする両親の間に生まれ、その環境の中で育ってきた。言うなれば、生まれながらの福祉っ子なのである。かかる境遇に生まれた者の常で、彼女の場合も、迷い、反撥し、悩み、抵抗をこころみたようである。しかもその中から、自己本来の使命感をつかみとり、新たな自己を造型し、見事この一書にそれを結晶させた。

私はこのように、この書を読んだ。著者の秘められた汗も涙も、これらの行間から読みとれたからである。私は脱帽して敬意を表し、心からの祝福をおくりたいのである。最後に、蛇足を加えるならば、この書は著者の人生への第一歩、初心の書であることを銘記すべきであろう。

昭和五十二年一月四日

榛名高原で

目次

第一部 向老のベース

老いの極みの「ありがとう」	15
浪漫あふれる花摘み爺	22
気力と愛を動力にして病いを克服したつるさん	30
人間性回復の嬉しい母の姿	37
近親者のエゴイズムとみつさんの覚悟	44
荒野に一人佇む老女	52
文明に背を向けた老婆の悲惨	58
底知れぬ孤独	65

第二部 向老の視点

エッチ作戦の本音 72

猫ばあさんの猫始末記 79

ポロリと流す一粒の涙 85

内なるものの自己への告発 95

サントホルプ家の暖かい居間 101

うるわしい特養ホーム 107

社会事業の思想―戦前から戦後への質的变化― 113

眠った老人ホームから社会参加の老人ホームへ 118

施設とヴォランティア 124

家族の愛を待つ在園者 132

死への気がかり 137

社会事業から福祉の理念を求めて

144

第三部

ヨーロッパ老人福祉一人旅

オランダの印象

153

オランダ盲老人ホーム実習記

159

ロンドン老人ホーム実習記

187

ロンドン老人病院実習記

198

あとがき***

209

よろこびも
悲しみも…





向老のペース

第一部

老いの極みの「ありがとう」

今でも忘れられない。Mさんのあのきりりとひきしまった口元を。Mさんはホームの最高令者だった。当時九十八才。森に面した一番奥まった六人部屋の真ん中のベッドに横たわっていた。とても耳が遠い人だった。

「おはようございます」と挨拶する。ハッとした表情で、目を見開いて、私の顔をじつと確かめるようにして「ハイなんでございますか？」と問いかえす。私は体をMさんの方に傾けて、耳元に口をすりよせて「おはようございますと言ったのです」と言う。「ああ、そうでございますか。おはよう」とMさんは厳かに答える。

Mさんは美しいおばあさんだった。白髪と色白の肌が、とても清潔を感じさせた。眼はいつも油断なく、私たち職員の動きを追っていた。彼女の眼はどろんと雲っていることがなかった。決して暖かい、温和な眼ではない。しかしいつも彼女のはっきりした意志の在り家を示していた。

あの物怖じしない、真直ぐな視線と、お世辞一つ言わず、儀礼的に「ありがとう、ありがと